

2024

5

令和6年5月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻369号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

# とあるお



公益財団法人  
さわやか福祉財団

さわやか福祉財団

# 2024年度 全国交流フォーラム開催のお知らせ

2024年  
7月8日(月) 13:30~17:30

皆様の  
ご参加を  
お待ちしております!  
います!

当財団の「新しいふれあい社会づくり」を  
ご支援いただいている皆様と一堂に会し、  
幅広い情報交換と交流を目的に  
全国交流フォーラムを開催いたします。

<概要> 第1部 さわやかフォーラム 事業報告、トーク等  
第2部 さわやか交流会 交流パーティー

<場所> 第1部：KFC Hall 第2部：第一ホテル両国  
(東京都墨田区 東京メトロ「両国」駅・JR「両国」駅最寄り)

<参加費> 第1部：無料  
第2部：運営協力金として2,000円(当日受付にて)

<申込締切> 6月25日(火)  
※定員に達し次第締め切りとさせていただきます。

- 詳細は決まり次第、財団ホームページに掲載いたします。
- さわやかパートナーをはじめとするご支援者の皆様には、別途詳細を記した案内状を5月下旬に郵送いたしますので、お申し込みはそちらをご活用ください。
- 内容等は変更となる場合がありますのでご了承ください。

お問合せ

電話 (03) 5470-7751 全国交流フォーラム担当：小野島、大石

お申し込み

「全国交流フォーラム」宛  
FAX (03) 5470-7755 メール sw@sawayakazaidan.or.jp

# さあ、言おう

2024年5月号

## CONTENTS

### 2 新しいふれあい社会 実現への道

#### 問いを立てる

清水 肇子

### 4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

#### 買い物を通して認知症の人の尊厳と自立を支える

スローショッピング（岩手県滝沢市）

### 12 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

#### ごちゃまぜで築くソーシャルファミリー

一般社団法人子ども村ホッとステーション（東京都荒川区）

### 22 新連載 共生社会 — 認知症との新しい向き合い方 ①

#### 「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」成立・施行！

社会医療法人財団石心会理事長・川崎幸クリニック院長 杉山 孝博

### 24 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から ②①

#### フードロス お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

### 26 新連載 人生100年 地域とつながる施設とは ①

#### 100年時代とわたし 公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

#### 新しいふれあい社会づくりに向けて

#### 18 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

#### 30 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）  
ご寄付者の皆様のご紹介

#### 32 NEWS & にゅーす

#### 34 活動日記（抄）

①③「地域助け合い基金」ご寄付のご案内

②③日本老年医学会学術集会  
シンポジウムのご案内

④さわやかパートナー・  
「さあ、言おう」のご案内／表紙絵から

# 問いを立てる

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

地域活動を住民で話し合うとき、あるいは、生活支援コーディネーターや協議体の中で方向性を議論するときなど、どのように意見をまとめていけばよいのか苦労することは多いだろう。

「自由な発想で意見やアイデアを出し合うまではまだいいのですが、そこから先、さらに深く内容を詰めて進めていこうとすると、なかなかうまくまとめることができません」。こんな悩みを以前、自治体の職員の方から吐露されたことがあった。多かれ少なかれ、そうした思いを持っている人はいるのではないだろうか。

住民主体の地域づくりを進めていくために、私たちは、当事者や関係者による少人数ごとのワークショップ（意見交換会）をお勧めしている。何よりも自分たちで考え、決定して実行し、課題を感じたらまたそこから考え合って実行する。時間はかかるがこうした過程を地道に踏んでいくことこそが、結局は住民の皆さんがいきがいを持って継続的に取り組み、それが成果につながっていくという王道だからだ。ただ確かに、そうした際の進行役のいわば腕前によって、話し合いの出来が左右されることも少なくない。

話し合いに馴れている人たちがばかりならよいが、地域では必ずしもそうではない。そもそもうまく話せない人が意見もそれほどないかといえば、全くそうではなく重要な情報や深い思いや悩みを持つていることは多い。助け合い活動を具体的に広めていくためには、地域の実情を直視して率直に語り合うことが必要だが、起きている困りごとや課題からやさしい言葉で逃げているだけでは事態は知らぬ間に深刻になっていく。そこをどう共有し、そして希望とやる気につなげていくかが地域づくり担当者に問われてくる。

少しずつ心を開いてもらいながら、やわらかく話を引き出し、相反するような意見もうまく吸収して合意する方向に持っていく生活支援コーディネーターや活動リーダーの進行ぶりを端で見ていると、すばらしいなと感心する。そうした皆さんに共通しているのが、「問いの力」をうまく活用していることだ。つまり、質問の立て方が非常にうまい。話を積極的にまとめようとするや押しつけともとられがちだが、質問という形で投げかけて整理している。「どうですか？」と漠然と「はい」や「いいえ」を尋ねるのではなくて、参加者が自分の意見を具体的に言えるように話を向ける。こうしたことは手法として関連の講座でも学べるが、技術というより、相手を尊重して理解していこうという思いが何よりも根底にあるように感じる。

今、合意形成をどう進めるかは、地域づくりの現場だけではなく、企業でもネットワークの連携の場でも多く求められている重要な要素となっている。号令一下で動いてきた社会から脱却し、一つの決まった正解ではない多様な選択肢を持つ社会となった。追及するための問いではなく、互いを理解し共感を持ち合うための問いの力を改めて磨いていこう。



# 買い物を通して

## 認知症の人の尊厳と自立を支える

スローショッピング（岩手県滝沢市）

認知症があっても自分のペースで安心して買い物を楽しめる。医師と店舗、ボランティアの人々などさまざまな主体が協力して実現した「スローショッピング」の現場取材しました。（取材・文／境 朗子）

### 本人のできることを奪わない

毎週木曜日になると、認知症の人やその家族たちはちよつとウキウキする。滝沢市内のスーパーマーケット「マイヤ」滝沢店で行われる「スローシヨツ

ピング」に参加できるからだ。認知症になると、買い物にまつわる心配は尽きない。商品が多すぎてどこに何があるか分からない、会計に手間取り周囲の冷たい視線を浴びる、買った物を置き忘れる――。

「と呼ばれる地域ボランティアがいりし、設置されているスローレジでは認知症サポーター養成講座で学んだ従業員が対応する。誰にも急かされることなく自分のペースで買い物ができるのだ。

でも大丈夫。滝沢店には「パートナ

午後1時頃、滝沢店のイートインス



商品陳列棚の案内を床に大きく表示。「視線は上より下に行く」との本人や家族からの意見を反映した。誰にとっても分かりやすいと評判



パートナーは商品選びから会計、袋詰めまで本人のペースで支える



カートには店内の案内図が取り付けられ、メモ用紙を置ける工夫が施されている

ペースには認知症の人やその家族たちが集まってくる。この日の参加者は、本人、家族、オレンジ色のスカーフを身につけたパートナーら計28名。ここを会場にした「くつろぎサロン」は、休憩や参加者同士の交流の場となる。ご本人たちは馴染みのパートナーに笑顔で迎えられ、大張り切りの様子だ。「ケーキを買わなくちゃ」。買い物リストを手にした女性がカートを押しながらかつぶやく。横で付き添うパートナー

ーが「ご主人のお誕生日の準備だそうです。ご主人はお幸せだわ」と声をかけると、女性は目を細めた。パートナーは目的の陳列棚

に案内したり、値札や商品説明を読み上げるなどしながらサポートする。同じ商品を2度選ぼうになるとさりげなく声かけ。控えめで心優しい友人のような存在だ。決して先回りして本人のできることで奪ったりはしない。全員、認知症サポーター養成講座を受講しているから、接するときの大事な「心得と作法」を身につけている。この日、スローレジを担当していた従業員ながほの永洞純子さんは、「満足された様子で買い物を終えていただくとうれしいですね。私の母は認知症が進んで寝たきりですが、もっと前にスローショッピングがあったら参加したかったかもしれない」と話していた。

滝沢市は、盛岡市のベッドタウンとして約5万5000人が暮らす近郊農業の盛んな地域だ。この自然に恵まれたのどかな地に、スローショッピングが誕生したのは2019年7月。発案

者は、市内の「医療法人館こんの神経内科・脳神経外科クリニック」理事長、紺野敏昭医師だ。認知症の人を長年診察して見えてきたのは、買い物に行くのを諦める人が多いということだった。「家族に買い物止められてしまう。店に行けたとしても家族主導で何もさせてもらえない。『認知症になったら何もできなくなる』という周囲の偏見に押しつぶされ、萎縮し、閉じこもっ



スローレジと従業員の永洞さん

たり孤立したりしてしまおうのです」と話す。

**専門職だけで進めない。そして認知症サポーターにも活躍の場を**

「買物のハードルを低くできる店があったらいいなあ…」

買い物支援の構想を3年間ほど抱えていた紺野医師は、意を決してマイヤの米谷春夫会長に電話をした。東日本大震災直後、食のライフラインを支えようと懸命にスーパーの営業を継続した人で、尊敬していた。

米谷会長との面談が実現したのは、電話の翌月19年3月。当初は1人で会



紺野医師



マイヤの辻野さん

うつもりだったが、行政など関係機関とも一緒に行動する必要があると思、普段から関係ができていた市地域包括支援センターと市社会福祉協議会の職員にも同席してもらった。

「認知症の人の買い物行動を支援する取り組みによって、ご本人の自信と尊厳を回復させ、自立を支えて家族の中での役割感を取り戻してもらいたい。協力していただけませんか」

米谷会長はこの提案を快諾。その場と同席していたのが、マイヤの執行役員販売部統括マネージャーの辻野晃寛さんで、プロジェクトの力強い推進メンバーとなった。

4月には「認知症になってもらさしいスーパープロジェクト」が発足。メンバーは、紺野医師が代表を務める岩手西北医師会認知症支援地域ネットワークワーク、マイヤ、市包括、

市社協、認知症の人と家族の会。行政や社協が参画することで各方面の信頼も得やすくなり、プロジェクトは順調に進んだ。

辻野さんは、「プロジェクトでは『それぞれが軽い負担で継続できる取り組みにしよう』と話し合いました。弊社役割は場所のご提供と、認知症の方などを優先するスローレジを設けること。これだけにしました。パートナーさんの募集・養成、認知症の方の見守り等は包括さんや社協さん、医療関係の方にそれぞれ担っていただく。普通の買い物ですから、社会貢献活動のような特別な買い物といった位置付けでなく、肩の力を抜いて長続きさせようと思いました」と話す。

紺野医師は「大事なのは専門職だけで進めてしまわないこと。結局押しつけがましい取り組みになって、広がりにくいです」と力を込める。だから、認知

症の人や家族など当事者の意見をしっかりと聞いてプロジェクトに反映させることに注力した。また、滝沢店の従業員向けに認知症サポーター養成講座も開催。誰でも受講OKにしたら市民もたくさん参加し、その中には後にパートナーとなる人も大勢いた。

「国が推進する認知症サポーターの数は増えていますが、役割がなくて何をしたいかわからない人が多い。スローショッピングが広まれば、そういう人たちの活躍の場も増えるでしょう」

(紺野医師)

### ● 本人、家族、パートナー… みんなのくつろぎサロン

現在、登録パートナーは30名ほど。

代表を務める浅沼英美さん（75歳）は、元県職員。土木分野一筋で、介護や福祉についてほとんど知らずに来たが、退職後に高校の同級生だった紺野医師



パートナー代表の  
浅沼さん

くつろぎサロンは、  
介護する家族にとっ  
ても大事な場所だ

に勧められて養成講座を受講しパートナーになった。

「会計を自分でやらなかった方が、あ

るとき『やってみたい』とおっしゃるようになる。当事者の方がうれしそうに買い物されるのを見ると、最高に幸せです。私も今はサポートする側になりますけれど、いずれサポートされる側に立つときが来るでしょう。でもスロースポーツに関わっていると、安心して年を取れるなと思えます」

そして、安心や喜びは家族介護者にももたらされる。くつろぎサロンでゆったりと過ごすのが好きだという遠藤千賀子さん（65歳）は、アルツハイマー病と診断された母親と共に、2年ほど前からスロースポーツに参加するようになった。

「母は家でふさぎ込んでいましたが、ここで買い物をするようになってから社交的になりました。フィットネスクラブで運動まで始めたんですよ。くつろぎサロンには専門職の方もいるので私もいろいろと相談できるし、普段は



パートナー（奥の女性）と交流する  
櫻野順子さん（右）、夫の正之さん（左）

言えないことも介護者同士で話せます。感謝しかありません」

傍らの母親も「おかげ様で十分楽しんでますよ。買いたい物を見ながらパートナーさんとお話するのが楽しくて」と笑顔を見せる。

パートナーと久しぶりに再会し、くつろぎサロンで話に花を咲かせるのは当事者の櫻野順子<sup>よしか</sup>さんと夫の正之さん（76歳）だ。

「順子さん、退院されてよかったです

ね。またお買い物ができますね」とパートナー。順子さんは言葉を発しづらいが、パートナーの言葉をしっかりと受け止めているようだ。順子さんがスロースポーツを好きな理由の一つが「お友だちに会えること」と正之さんは話す。この日は欠席だったが、お友だちだというそのおしゃれな女性の当事者とは、言葉なしで穏やかにコミュニケーションを取り、楽しいひとときを過ごすのだとか。2人の微笑ましい対話は、サロンの空気を和ませるとい

う。誰もが支え合い、幸せを感じ、感謝し合う場となっているくつろぎサロンは、買い物客にこの活動を知ってもらう効果もある。実際、買い物中にスロースポーツの様子を見てパートナーになった人や、同じく買い物に来ていた軽度の認知症の人が、自分も他の当事者を支える「ピアパートナー」と

なつて活躍した例もあるそうだ。

## インフォーマルな支援が重要 NPO化でさらに広がる活動

「スローシヨッピングの取り組みをさらに発展させよう」。そんな声があちこちから上がり、昨年11月、「NPO法人やまぼうしネットワーク」が立ち上がった。認知症当事者やその家族などと地域をつなぎ、みんなが安心して暮らせるまちづくりを推進するのが狙いだ。紺野医師を理事長に、パートナーや看護師、辻野さんが理事を務める。「認知症になると、医療や介護のフォーマルサービスはあっても、すき間がたくさんあるため十分な支援が行き届きません。それを埋められるのが、ボランティアや地域住民等によるインフォーマルな支援。スローシヨッピングの出番なのです。今後、私がいなくなつて終わってしまうのでは意味がありま

せんから、住民主体で持続可能な地域資源をつくっていききたい」と、紺野医師はNPO設立の目的を語る。

スローシヨッピングから派生して、パートナーたちの新たな活動も生まれた。男性介護者が「毎日の食事作りが大変」と話すのを受け、「男の料理教室」がスタート。パートナーで管理栄養士でもある山口芳光さん（69歳）らが講師を務める。また、認知症の人た



スローシヨッピングから派生した「男の料理教室」の様子。左が講師を務める山口さん

ちが懐かしい思い出を語り合う「散歩の会」では、パートナーたちが傾聴者となり、共感する。

スローシヨッピングには地元企業の関心も高まっている。昨年4月、取り組みに賛同した岩手ダイハツ販売株式会社、ワゴン車「スローシヨッピング号」を提供。複数のパートナーが交代で運転を担当し、移動手段の確保が



スローシヨッピング号の運転を担当するパートナーの南館勇雄さん（70歳・左）。「感謝されるうれしさを実感しています」

難しい参加者への生活支援サービスとして、送り迎えだけでなく買った物を自宅内に運んで片付けたり、冷蔵庫の中を整理するなどのサポートをしている。運転も担当山口さんは「車中、ご本人さんたちと買い物のお話で盛り上がります。解放感に満ちた楽しい時間です」と語る。

\* \* \*

スローショッピングでは、買い物が終わるとイトインスペースで反省会を開き、課題を出し合いながら次回への楽しみや意欲へとつなぐ。「カート内の案内板の文字が小さくて読みにくいです」といった要望以外に、「体調が優れなかったけれど、元気に店内をまわられて自信ができました」「また買い物に来るのが待ち遠しい」。そう発言する当事者たちの明るい声がパートナーたちの心を動かす。

マイヤは岩手県内から宮城県北で18

店舗を展開しているが、現在4店舗でスローショッピングを導入。より良い活動にすべく、店舗間でも情報交換を行う。「スローだ

けでなく、いろいろな企業を取り組んでくださるといいですね」と辻野さん。

多様な市民が包容力と共感の心で支え合う。その当たり前のような積み重ねが「地域の文化となる」(紺野医師)日も近いことだろう。



今年3月、参加者数延べ4000人を達成したときの記念写真

紺野敏昭医師が理事長を務めるNPO法人やまぼうしネットワーク、株式会社マイヤ、ボランティアのパートナーなどが認知症の人とその家族を支え、安心して買い物をしてもらうことで認知症の人の尊厳と自信を取り戻してもらう取り組み。マイヤ4店舗で実施。滝沢店では、毎週木曜日午後1時から開催。

●連絡先 / 〒020-0632 岩手県滝沢市牧野林1010-4  
NPO法人やまぼうしネットワーク 電話 019-699-1111  
(こんの神経内科・脳神経外科クリニック内)

# 「地域助け合い基金」で 地域共生社会をつくりましょう

皆様からのご寄付をお待ちしています

「地域助け合い基金」は、地域共生社会実現のため、地域における住民主体の助け合い活動を支援する基金です。日本国内の活動が対象で、高齢者、子ども、障がい者、生活困窮者、外国人ほか、分野は問いません。また、支援したい自治体をご指定いただくことができ、能登半島地震の復興支援としてもご寄付いただけます（関連→31ページ）。

皆様のご寄付をどうぞよろしくお願い申し上げます。

## <ご寄付の方法>

### (1) 銀行振込・郵便振替によるご寄付

※お振り込み先は、31ページをご覧ください。

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。お電話でも承ります。

※ゆうちょ銀行（郵便局）の場合は、通信欄に、ご指定がある場合の自治体名と、一言応援コメントなどをご記入ください。また、払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

### (2) クレジットカードによるご寄付

当財団ホームページよりお申し込みください（関連→21ページ）。

## <税制上の優遇措置>

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<お問合せ>  
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755  
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

いいきき わくわく

## 子どもと一緒に 地域で輝こう



### ごちゃまぜで築く ソーシャルファミリ―

一般社団法人子ども村ホッとステーション（東京都荒川区）

子どもが抱える諸問題に早くから取り組んできた東京都荒川区で、「子どもの居場所」第1号として2014年に立ち上がった「子ども村ホッとステーション」。血縁のない家族・地域のソーシャルファミリ―をつくる活動を取材しました。

（取材・文／森 祐子）

### ● 子どもを見守るのが地域の大人

子ども村ホッとステーションの活動は10年前、地元で子育てをしてきた大村みさ子さんの「子どもたちの心・生活をサポートするための居場所をつくりたい」という思いから始まった。そのとき、大村さんの活動を支援してくれたのが、当時は荒川区社会福祉協議会職員だった鈴木訪子<sup>ことこ</sup>さんだ。

現在は、大村さんが代表理事、鈴木さんが理事の一人として団体を運営している。

大村さんはもともと3人の育児をしながら、子どもの活動に子どもと一緒に参加している母親だった。我が子の習い事に積極的に関わり、児童合唱団の事務局長やサ



子ども村ホッとステーション（2階）



大村さん



鈴木さん

子の生活は徐々に荒れていき、高校を卒業できなかった。その後、街で力仕事の作業着を着ている姿を見たこともあったが、仕事はどれも長続きしないようだった。

この一件で、大村さんは「地域の大人が子どもの良いところを伸ばしてあげられなかった」と痛感した。「学校や行政は子どもの人生の一時期に関わりますが、地域の大人たちはその子が大人になるまで見守る立場にあります。地域の大人として、自立に向かっていく小学校高学年から中学生

サッカーチームの指導者にもなった。今ではサッカー4級審判員の資格を持つほどだ。

ところがあるとき、小学生のサッカーチームの得点王で才能に恵まれた子が、教室では学級崩壊を引き起こしているを知った。その

高校生のサポートがしたいと思いました」

### ●一緒に過ごし「血縁のない家族」に

大村さんは、一緒に時を過ごして家庭の代わりとなり、学校とも関わって子どもを支援しようと考えた。スタッフは意識的に多世代を集め、支援する・される関係でなくお互い様の「血縁のない家族・地域のソーシャルファミリー」の居場所「ホッとステーション」をつくろうと取り組み始めた。立ち上げには区社協の助成金を活用し、低額で週1回貸してくれる地元企業の社屋の3階も紹介してもらった。その後、他の子育て交流サロンの人たちに「一緒にやろう」と声をかけてもらい民家の2階に場所を移して、ホッとステーションは週1回からいつでも行ける場所になった。さらに2020年には、都電荒川線の駅からほど近い今の場所に移転。元は高齢者のデイサービスに使われていた場所でエレベーターもあるため、子ども以外に高齢者や障がい者など、より多くの人を受け入れられるようになった。子どもたちも、いろ

いろいろな世代と関わることで社会性が身につくと考えている。

ホッとステーションには6つの活動がある(下表)。今回は、「中高生ホッとステーション」と「ユニバーサルステーション」を取材した。

## ● みんなで勉強、タご飯 中高生ホッとステーション

木曜日の夕方。一人、また一人と子どもたちが「中高生ホッとステーション」にやって来る。「中高生」と銘打ってはいるが、小学生ももちろんOK。到着したら、まずは勉強の時間だ。

この日、勉強を教えていたのは大村さんと大学院生の学習ボランティア相庭貴行さん、そして初めてボランティアで参加するという高校生の男子2人だ。あちこちから「相庭くん！ この問題が分からない！」と呼ぶ子どもたちの声が響く。子どもたちが年齢の近い相庭さんに大きな信頼を寄せているのが分かる。

相庭さんは、東京大学在学中に大村さんが大学

に講演に来たことでホッとステーションを知った。偶然にも自分が一人暮らしをしているアパートから徒歩2分の距離だった。地域福祉や教育学に興味があった相庭さんは、学習ボランティアで参加することにした。そして、生きにくさを感じる子や安心安全な家庭がないなど、厳しい状況を生きる子どもたちと出会った。「自分の育ちの原体験と向き合う経験をさせてもらっています。家庭や学校の問

### 【子ども村ホッとステーションの活動】

活動名	活動日・時間	内容
中高生ホッとステーション	木曜日 17～20時	ロールモデルとなる若者と一緒に活動する、地域の子どもの居場所
ユニバーサルステーション	月・水・木曜日 10～14時	多世代の居場所づくり
ふぁみ～る子育て交流サロン	火・金・土曜日 10～15時	0～3歳までの赤ちゃんと保護者の居場所
放課後クラブ	月・水曜日 17～19時	自分らしく自由に過ごせる居場所
アウトリーチ	週1回×3か月	不登校の子どもを自宅から居場所へつなぐ活動
生活支援	随時	生活・家族の支援活動、フードバンク、配食など



学習ボランティアの  
相庭さん



勉強する子どもと高校生ボランティア

勉強が終わったら、地域のボランティアの皆さんが夕ご飯を作っている間に、子どもたちと学習の日は鬼ごっこで走り回っていた。子どもたちに話を聞いてみると、「ホッとステーションで友だ

題など、僕の人生にもそれなり大変なことがありました。今ここで子どもたちと過ごすことで、自分の人生と向き合い、この子たちに何を伝え、どう声をかけるか勉強の日々です。帰るときには大村さんたちが余った食事を持たせてくれたりして、ありがたいです」と笑顔で話してくれました。

ちも遊ぶ機会も増えた」「暇な時間が減っている」「自分のペースで勉強ができて、分からないところは教えてもらえるからいい」、そしてやはり「ご飯がおいしい！」という答えが返ってきた。

外遊びで有り余るエネルギーを発散した子どもたち。次はお楽しみの夕ご飯だ。この日のメニューはカレー。どの子もあつという間に平らげて、自分が食べた食器は自分で洗って片付ける。

ホッとステーションにはたくさんの方の支援者がいる。長年にわたり、地域の人たちや企業等が定期的に食材提供で支援。また、地域の更生保護女性会や「尾久母の会」をはじめ、さまざまなボランティアの人たちが食事を作ってくれるので、子ども100円、大人100〜200円という安価で提供できている。そして何より、季節の野菜豊富



公園で鬼ごっこをして遊ぶ子どもたちと学習ボランティア



この日のメニューはカレーとサラダ。みんなでテーブルを囲む



自分が使った食器は、子どもたちも自分で洗う

● **みんなボランティア、みんな利用者**  
**ユニバーサルステーション**

同じ木曜日の昼間は、「ユニバーサルステーション」が開催されている。訪問すると、3つのグ

な手作りのあったかい食事を提供する。毎月フードパントリーも行っている。しばらくすると保護者がお迎えにきた。子どもたちが学習ボランティアと遊んでいる間、保護者は大村さんと話し込み、いろいろと相談しているようだった。こ

ループが活動していた。日本語の勉強になるからと通ってくる中国出身の人などもいる。

1つめのグループは、ホッとステーションの活動資金をサポートするためのグッズを作っている。この日は、安眠を促すラベンダーを仕込んだ布製のアイデアグッズを縫っているところだった。

「ここに来ると役に立っていることがあるし、子どもたちがかわいくて」と参加していた女性。

2つめのグループは、カードゲームなどのメンテナンスをやる。そして、3つめのグループは子どもたちの勉強だ。学習ボランティアに教わりながら、それぞれ課題に取り組んでいた。

ここは地域の誰もが集い、昼ご飯も共にできる場所。子ども、高齢者、障がい者、外国籍の人、そしてボランティアがごちゃ混ぜで、一見すると誰が利用者で誰がボランティアなのか分からない。端のテーブルでは、事務を一手に引き受ける理事の浅野



芳明さんがパソコンで作業をしていた。浅野さんが昼ご飯を食べ終わると、障がいのある人が浅野さんの食器を下げて洗っている。案



理事の浅野さん

内してくれた鈴木さんに聞くと「最初はボランティア希望者と参加希望者に分かれていたのですが、気づいたらお互い様の関係になり、みんながボランティアになっていました」と言って笑った。

皆が食後にくつろいでいると、「皆さんのおかげで無事に卒業できました、ありがとうございしました！」という女性の声が響いた。入り口を見ると、ちょうど今日が小学校の卒業式だったという利用者の男の子とその両親が、晴れ姿のままあいさつに来たところだった。皆が、「立派だなあ！」「かっこいいよ」と、うれしそうに写真を撮っている。男の子は恥ずかしそうにお母さんの腕にしがみつきながらも、しっかりとカメラ視線だ。

お母さんに話を聞くと、「うちの子は発達に凸

凹があるので、特別支援学級に在籍しているのですが、学校以外の居場所が欲しい、息子にたくさ

んの人と関わって生きてほしいと思って、親子でここに通うようになりました。息子が学校で見せる顔とここで見せる顔は、少し違っています。そんな姿を見られるのもうれしいですし、私もここに来るほかの子どもたちの人生の、何かしらのスパイスになれたら」と話してくれた。

家庭が担えなくなっただものでも、これからは子どもを真ん中こんな形で補っていけるのかもしれない。



卒業式後の親子と一緒に喜ぶ皆さん

# 応援ありがとうございます！

## 「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごとと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、空き家での居場所と食堂の活動、地域福祉推進の拠点を目指す居場所、有償ボランティア等の活動を紹介いたします。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

群馬県吉岡町

### 提供された空き家で居場所と食堂

koharu日和

助成金額 15万円

2022年から、子どもから高齢者まですべての人たちを対象にお弁当や食料品を無料配布してきたkoharu日和。核家族が多い町で、子どもの孤食や一人暮らし高齢

者のために、多世代交流の居場所・子ども食堂をしたいと考えましたが、町内にコミュニティの拠点がなため「待っていては何も始まりな



空き家を活用した居場所の様子

い」と、まずイベントから始めました。そんな中、公民館で食堂を開催したところ、空き家を提供してくれる人と縁があり、場所が決まりました。

本基金の助成金は、その空き家の劣化した床を張り替える費用として活用していただきました。これにより、子どもたちが走り回っても安心できる場所を提供できているということです。

居場所は全世代を対象に、毎週水曜日15〜19時開催。夕方にはおやつ、夜には食事を提供して、高校生までの子どもは無料、テイクアウトにも対応しています。子どもたちは、日当たりの良い縁側に机を並べて宿題をしたり、広い庭で遊んだりしているそうです。参加した人からも「子どもたちもとても楽しそう。貴重な場所がありがとうございます」など喜びの声が聞かれるということです。

町役場や教育委員会も、町に子ども食堂ができたことを喜んでおり、今後は連携していく方向との報告をいただきました。



居場所で自由に過ごす地域の人たち

山梨県富士吉田市

## 共生の居場所を地域福祉の推進拠点に

ソーシャルハウス宝島

助成金額 15万円

地域社会には、家と学校・職場以外に安心できる居場所がもつと必要。そして、障がい、貧困、人種、一人親、認知症など、家族だけでは解決できない課題を、多様な人が関わり支え合う共生モデルを誕生させたいとスタートしたソーシャルハウス宝島。そういった場が地域にあることで、多様な暮らしへの理解や関心も深まると考えています。

本基金の助成金は、木造2階建ての常設型プラットフォーム立ち上げに伴う備品（防災カーテン、椅子、座布団、テーブル等）の購入に活用していただきました。

立ち上げ後は、高齢者や地域の人た

ちの地域サロンを開き、それぞれが自由に過ごすことを前提としながらも、一緒に食事を作って食べたり、百歳体操を実施したりしています。参加者から「誰かと一緒に食事をするとてもおいしい」等の声が聞かれ、地域からはさまざまな寄付があるほか、草取りや掃除などを手伝ってくれる人たちもいるとのこと。さらに、「共生」をテーマに掲げたことで、不登校の子の保護者や精神的な理由で体調を崩している人なども相談に訪れており、今後は行政等とも連携しながら不登校の子とその保護者の居場所としても整備していきたいそうです。

「福祉とは、実はすべて自分事という認識を広めていきたい」と抱負を寄せてくださいました。

大阪府河内長野市

## 年齢を重ねても住み続けられる街に有償ボランティア活動を開始

支えあい 南風流街 南ヶ丘

助成金額 15万円

地域の全住民を対象とした「南ヶ丘よりよい街づくりア

ンケート」の実施、バス停と自宅を結ぶ移動支援の実証実験を行うなど意欲的な取り組みを進めてきた「支えあい南風流街 南ヶ丘」。高齢化率50%以上の地域で、年齢を重ねても住み続けられる街づくりを目指し、ちょっとした困りごとを住民同士で支えあう有償ボランティアを開始しようとする準備委員会を設立。再度、詳細な住民アンケートを行ったところ、96%の人が「支えあい活動が必要」と答え、サポーターとして88名の手が上がりました。

本基金の助成金は、移動支援車両用マグネットや生活支援・集いの場用のぼり等の購入、パンフレット・チケット作成費、移動支援運転講習テキスト代、その他備品等に活用していただきました。SCとも、情報提供や移動



移動支援の様子

## 「地域助け合い基金」 状況のご報告

申し上げます。

地域助け合い基金は、能登半島地震の被災地・被災者にも支援を実施してまいります。  
引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

(4月15日) 当財団ホームページ開示時点  
◎寄付受付額 243件 1億7422万2836円  
このうち当財団より1億4162万1000円を供出  
◎助成実行額 1093件 1億6970万0064円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード  
決済ページ



財団ホームページ内  
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金  
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

支援の実証実験などで連携しているそうです。  
その結果、電球交換や網戸の張り替え等の生活支援、移動支援、自治会館で月4回行う年齢を問わず誰でも参加できる集いの場などの活動がスタートしました。サポーターからは「やっついて楽しい、人の役に立てて楽しい」といった声が聞かれるそうです。

「住民一人ひとりが持っている特技を住民のために提供していただき、みんなが自然に助け合える街になれば」との報告をいただきました。



# 共生社会

1

― 認知症との  
新しい向き合い方

社会医療法人財団石心会理事長  
川崎幸クリニック院長

杉山 孝博



(すぎやま たかひろ)  
1973年東京大学医学部卒。1998年9月川崎幸クリニッ  
ク院長に、2023年7月社会医療法人財団石心会理事長に就  
任。1981年から公益社団法人認知症の人と家族の会の活動  
に参加。全国本部の副代表理事(副代表)。公益社団法人日本認  
知症グループホーム協会顧問、公益財団法人さわやか福祉財団  
評議員。著書は、杉山孝博著「マンガでわかる 認知症の9大  
法則と1原則」(法研)、杉山孝博監修「認知症の人の不可解な  
行動がわかる本」(講談社)など多数。

## 「共生社会の実現を推進するための 認知症基本法」成立・施行！

「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」

が昨年6月14日に参議院で可決・成立し、本年1月  
1日から施行されました。

「認知症基本法案」は2019年6月18日に初めて  
衆議院に提出され、以後継続審議されてきました。

超党派の「共生社会の実現に向けた認知症施策推進  
議員連盟(事務局長 鈴木隼人衆院議員)が多くの  
関係者の意見(私や認知症の人と家族の会鈴木前代

表も意見を述べました)を聞いて法案をまとめ、国  
会で審議されたものです。

「認知症基本法」は、「認知症の人が尊厳を保持し  
つつ希望を持って暮らすことができるよう、…認知  
症施策を総合的かつ計画的に推進し、もって認知症  
の人を含めた国民一人一人がその個性と能力を十分  
に発揮し、相互に人格と個性を尊重しつつ支えあい  
ながら共生する活力ある社会(＝共生社会)の実現」



が目的とされています。

認知症対策を「国や地方公共団体の責務」と定め、「認知症施策推進基本計画」の策定を義務付けています。また、「国民の責務」として「共生社会の実現を推進するために必要な認知症に関する正しい知識及び認知症の人に関する正しい理解を深めるとともに、共生社会の実現に寄与するよう努めなければならぬ」とうたっています。

基本施策としては、①国民の理解の増進 ②バリアフリー化の推進 ③社会参加の機会の確保 ④認知症の人の意思決定の支援及び権利利益の保護 ⑤サービス提供体制の整備 ⑥相談体制の整備 ⑦研究等の推進 ⑧認知症の予防などを挙げています。国際アルツハイマー病協会（ADI）や世界保健機関（WHO）などが「世界アルツハイマーデー」と定めている9月21日を「認知症の日」とし、9月を認知症月間と規定しています。

認知症の人と家族の会は、「この法律が成立したことで、日本における認知症への基本的な考えが明示され、社会的な『認知症観』の転換点となりうる

事に期待するとともに高く評価いたします。また今後、さまざまな取り組みが大きく前進することを願っています」「第一条には『社会の一員として尊重される社会』と明記されています。この『社会の一員として』が重要と考えます。基本法の理念が具現化されることで、近い将来、社会における認知症への差別や偏見が低減し、『認知症の人』ではなく、『ひとりの人』として係わることが当たり前の社会、地域になる事を切に願います」という鎌田代表の声明を発表しました。

「がん対策基本法」（2006年6月成立、2007年4月施行）ががんの予防・研究・医療・施策に極めて大きな影響を与えたことを考えれば、「認知症基本法」が認知症をめぐる行政や社会の動きを飛躍的に促進することを期待しています。

今や、がん匹敵するほどの大きな問題になった認知症（2025年の認知症推定患者数700万人以上）について、国民全体の問題として国が率先して取り組むことは必然的なことだと思えます。



ジェンダーの  
視点から

# 人生 100年時代を 生き抜く知恵 21

## フードロス

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

「ドギーバッグ」という言葉を初めて耳にしたのは、アメリカ留学時代だったから、半世紀以上も昔のことになる。レストランで食事をした後、招待してくれたアメリカの友人が店の人に「ドギーバッグをいただけませんか」と聞いている。「何？ 犬の袋って」と不審に思っただけで、食べ残しを持ち帰る容器のことだという。「もったいないから家に持ち帰って、飼い犬にあげる」という意味だ。だが実際には本人や家族が食べることが少くない。その時も、友人宅に持

ち帰った料理をさかんに、もう一度飲み直すということになった。

日本でも、中華料理店で大学の同窓生たちの集まりがあった際に、持ち帰ったことがある。女性の多い集まりで、かなり大量に残ってしまった。海外生活の経験のある人もいたので、持ち帰りたいということになった。

店主が出て来て、「食中毒を起こすと困る」とか「保健所に文句を言われる」と大分もめたが、あまり暑くない季節だったので、「家に戻って必

ず火を通し、早めに食べること」と念を押されたうえで、しぶしぶ許可してくれた。

美味しく食べられる賞味期限は、食べても健康上問題がないとされる消費期限よりもかなり短く設定されている。多くの日本人は、賞味期限を見て購入するので、ちょっと古くなるとどんどん捨ててしまう。

かつてボランティア団体が、スーパーやコンビニで賞味期限切れ間際に捨てられてしまうパン、おにぎり、弁当などを回収して、ホームレスたち配ったことがある。ところが早速、保健所から目をつけられて禁止されてしまった。

たしかに食中毒の恐れがないわけではないが、季節によっては食中毒の心配をしなくてもよい時期もある。

昭和20年代のもののない時代に子ども時代を過ごした私は、業者関係の宴会の後で父が持ち帰る折詰の料理を食べるのが楽しみだった。当時、貧しい食生活を送っていたので、折詰の中に焼いた

鯛やゆでた伊勢海老などが一匹まるごと入っていたのには驚かされた。

日本が経済復興を遂げた後、そして日本人の衛生観念が格段に上がって以来、宴会料理を持ち帰るという習慣はしだいに姿を消していった。しかし地方では、持ち帰りという習慣が最近まで残っていたようだ。

夫の出身地である東北の小さな町での葬式に参列したところ、精進落としの席に食べきれないほどの料理が並んだのにびっくり。こんなにたくさん食べられるのかと思っていたら、大部分が持ち帰りということになった。

今日、食べられるのに捨てられる「フードロス（食品廃棄物）」は、日本全体で年間約523万吨、一人一日あたり約114グラム（2021年度推計）。廃棄や焼却するための費用や排出される二酸化炭素量も馬鹿にならない。環境改善のためにも、食品廃棄物はできるだけ少なくなるよう心掛けたい。

# 人生100年 地域とつながる施設とは

1

## 100年時代とわたし

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

今では、人生100年時代という言葉は日常的に使われるようになってきましたが、それは、イギリスのロンドンビジネススクールの教授リンダ・グラットン氏が「LIFE SHIFト0年時代の人生戦略」（東洋経済新書発行）の著書で提唱されたことがきっかけになりました。その後、安倍総理がリンダさんを招いて話を聞き、2017年9月に自ら議長となって「人生100年時代構想会議」を発足させたのです。しかし、



（ほんま いくこ）

図書館情報大学卒業（現筑波大学）。さわやか福祉財団評議員、学校法人光塩学園評議員。利用者の人権を守るための高齢者生活施設の認証・評価事業を創設。全国の介護施設や市民向けセミナー講師を務める。ハ表彰▽2005年国際ソロプチミスト東京受賞、2010年エイボン女性大賞受賞。ハ著書▽多数。近著『この一冊でわかる特別養護老人ホームを選ぶチェックポイント』（30ページ）。お申し込みは、AmazonかUビジョン研究所（電話03・6904・4611）へ

市民に広く認知されるきっかけになったのは、19年4月に小泉進次郎氏が自民党政務調査会厚生労働部会で「新時代の社会保障改革ビジョン」を発表した時に「人生100年時代」という言葉を使って政策提言したからだと言われています。

しかしながら、構想会議は岸田内閣になって21年11月に廃止されましたが、人生100年時代は我が事として考えていく必要があるとしていろいろな場面で活用されるようになっていきます。

「介護が必要になったらどうするか」「誰に看取ってもらうのか」を考える人は少しずつ増えてきてはいますが、まだ漠然としていて、真剣に考えている人は多くありません。子どもがいる人は暗黙の了解で子どもが何とかしてくれるだろう。認知症予防の努力をしているからまだ大丈夫。老人ホームに入ることになるかもしれないが今考えることではない。と先送りしている人がたくさんいるのです。

特に日本は長寿国です。個人差はあるにしてもどんどん老後が長くなってきています。23年9月17日に総務省が公表した平均寿命は女性が87・09歳、男性は81・05歳で、高齢化率29・1%でした。さらに、単身世帯は全世帯数の約38・0%、65歳以上の5人に1人が一人暮らしです。生涯未婚率は、50歳時に未婚の人は男性28・3%、女性17・8%となっています。

「自分の生き方は自分で決め、自分で責任を持つ」という視点に立って、老後の人生設計を考えてい

く必要性が求められていることはこの統計から間違ったように思います。さっそく、60歳の節目に考えてみることを勧めます。

私たちは老いてどんな病気になるか、どのような最期を迎えるか誰にも予想できません。だからこそ生きてみる価値がありいつでもチャレンジです。でも、

在宅で暮らすことが限界にきた場合、人生最期の砦である特別養護老人ホームを正しく知っておくことは人生100年時代に役に立ちますので、これから一緒に考えていきたいと思えます。

人生設計	教育	仕事	老後
人生80年の人生設計	20年	40年	20年
人生100年の人生設計	20年	40年	40年
現在	20年	45年 (65歳定年)	35年

\*リンダ・グラットン氏の「ライフシフト」の基本的な考え方は、2007年に生まれた子どもの半数が100年以上生きると予測して、「人生100年時代」という言葉を使いました。

## シンポジウムに 高連協共同代表が登壇

さわやか福祉財団が事務局を務める高齢社会NGO連携協議会（高連協／1998年設立・高齢社会への対応策の推進を目的としたネットワーク団体）が、日本老年医学会と新たに連携し、6月に愛知県名古屋市で開催される日本老年医学会学術集会において共催でシンポジウムを行います。高連協の共同代表（一般社団法人日本老年医学会名誉会員・元理事長の大内尉義氏、当財団の清水肇子理事長）が登壇し、今後の超高齢社会のあり方について、エイジフリー社会やNPO・NGOの役割等を中心に講演します。

一般の方もお申し込み可能です。ご関心のある方はどうぞご参加ください。

### <第66回日本老年医学会学術集会>

#### シンポジウム 「老年医学の成果の社会実装をめざして」

◆ 日時：6月13日（木）～6月15日（土）

- 両共同代表が登壇するシンポジウムは、  
13日（木）8：40～10：10  
第1会場（2階大ホール）で行われます。

※学術集会全体の詳細は、下記ホームページからご確認ください。  
<https://www.congre.co.jp/66jgs2024/>

◆ 場所：ウインクあいち（愛知県名古屋市中村区名駅4丁目4-38）  
JR・新幹線・地下鉄・私鉄「名古屋駅」から徒歩5分

◆ 参加申込等：5月31日（金）正午

高連協参加団体経由での申し込みは無料です。  
詳しくは、下記問い合わせ担当までご連絡ください。

お問合せ

当財団社会参加推進チーム・高連協事務局 玉置  
電話 (03) 5470-7751  
メール [pr@sawayakazaidan.or.jp](mailto:pr@sawayakazaidan.or.jp)

# 新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、  
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、  
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる  
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・  
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記**（抄）



# ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2024年2月19日～3月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

## さわやかパートナー個人 (60件)

(都道府県別50音順)

北海道	濱田 純一	香川 昇	川尻 富士枝	松下 典子	森本 勝之
野口 道雄	千葉 県	紙透 由美子	小松 成子	宮地 良和	奈良 県
山形 県	伊藤 博行	神永 光男	坂口 富憲	三重 県	河野 平八
高橋 政春	鳥山 美知子	川井 信義	佐野 美樹子	藤田 清正	広島 県
栃木 県	鈴木 美智子	金城 清	杉山 静枝	滋賀 県	濱崎 雄司
飯島 恵子	高柴 正義	小西 達朗	吉田 旭雄	川瀬 庄平	山口 県
高柳 慎八郎	藤本 政子	下川原 直明	渡辺 政勝	京都 府	清水 博
群馬 県	三石 治子	菅尾 尚彦	福井 県	古海 りえ子	徳島 県
小山 範之	東京 都	芳賀 勝子	天谷 まり子	丸山 式子	河野 耕一
篠原 宏子	有馬 正史	山田 秀之	山梨 県	鶴田 秋生	高知 県
田中 恵子	井嶋 一友	山寺 博丸	長野 県	井出 清子	西元 和代
埼玉 県	伊丹 滋典	神奈川 県	柳沢 伸一	愛知 県	
今村 和喜子	尾崎 雄	井上 達也	北畠 映子	藤田 依子	
関根 美那子	小滝 義浩	加藤 博善			



## さわやかパートナー法人 (8件)

(50音順)

- NPO法人 思いやり支援センターくまの
- NPO法人 さわやか
- 品川成年後見センター
- NPO法人 市民助け合いネット
- NPO法人 地域サポートの会 さわやか高知
- 有限会社 藤樹
- 日本地震再保険株式会社
- 株式会社 堀場製作所

## 一般で寄付 (3件)

(50音順)

- 加藤 由紀子 (30万円)
- 丸山 式子 (1万円)
- 匿名希望 (10万円)

加藤 由紀子 (5万円)  
 匿名希望 (2千円)  
 石川県・能登半島地震支援V  
 朝田 充 (1万円)  
 上田 恵子 (5万円)  
 加藤 由紀子 (5万円)  
 黒瀬 義郎 (1万円)  
 小関 和夫 (1万円)  
 後藤 加奈子 (3万円)  
 塩瀬 潔泉 (3万円)  
 清水 肇子 (10万円)  
 妹尾 信二 (10万円)  
 高橋 恵理 (3千円)  
 鶴山 芳子 (10万円)  
 中村 雅子 (3万円)  
 保坂 雅宣 (1万円)  
 村田 幸子 (10万円)



## 「地域助け合い基金」は 能登半島地震の被災地・被災者も支援いたします

- 能登半島地震復興支援のご寄付の場合は、地域を「石川県」とご指定ください。  
当財団のホームページからクレジットカードでご寄付が可能です。あるいは以下の金融機関宛にお振り込みください。金融機関の場合は、お手数ですがホームページまたは電話などにより、石川県指定ご寄付である旨をお知らせください。  
(当財団HP「地域助け合い基金」ご寄付受付ページ)  
<https://www.sawayakazaidan.or.jp/fund/tasukeai/form.php>
- 当財団からも活動支援金を「地域助け合い基金」に拠出し、石川県をはじめ被災地・被災者の皆様を応援する活動を広く支援します。

お振り込み先

### ■銀行振込

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金  
 三井住友銀行 浜松町支店 (普通) 口座番号 7859452  
 三菱UFJ銀行 浜松町支店 (普通) 口座番号 0095446

### ■郵便振替 (払込取扱票)

加入者名：公益財団法人さわやか福祉財団  
 口座記号番号 00110-7-709627

- \* 「地域助け合い基金」では指定地域のないご寄付も常時募集しています。
- \* 「地域助け合い基金」は、さわやか福祉財団が事務手数料を頂戴することはありません。
- \* 「地域助け合い基金」をはじめとするさわやか福祉財団へのご寄付は、所得税・法人税等の優遇措置の対象となります。

# NEWS & にゅーす



## 第37回理事会を開催

第37回理事会が3月21日午後1時半から、東京・丸の内の新丸ビルコンファレンススクエアで開催されました。

監事1名はウェブ会議システムで出席し、定款の規定に基づき清水肇子理事長が議長を務めました。冒頭、昨年6月に就任され本会から新たに出席された雨宮孝子理事が紹介されました。続いて議案の審議に入り、清水理事長が2024年度の全体説明ならびに事業計画について説明をし、鶴山芳子常務理事が能登半島地震への対応を含む現場の状況の補足を行いました。

24年度の全体事業の大きな方向性として、よりしっかりと助け合い活動、つながりを創出していくことを目指し、併せてネットワークづくり注力して事業を進めていくこと。約10年前から、最重要事業として、全国各地で助け合いの地域づくりを進めるべく取り組んできた生活支援コーディネーター・協体支援はしっかりと継続しつつ、特に、本来の住民主体による助け合いの創出という目標に立ち返ること。あら

ためて地域共生社会づくりに向けて、いきがいと助け合いを地域の中に仕組みとして広げていく働きかけを強力に行っていくこと、の説明がありました。

以上を踏まえて事業計画では、ふれあい推進事業において、これまで拠点づくりを核として地域共生を推進してきた内容を発展させ、プロジェクトの重点をより「創出」に置き、助け合い・ネットワークの創出を新しく発展的に進めることとした。また、「地域づくり」という概念をプロジェクト名で明文化して対外的に訴え重要なものと位置付けた。社会参加推進事業では、社会人地域共生活動参加を推進すべくシニアの地域参加を具体的に働きかける取り組みの強化、情報・調査事業では対外的な広報および情報発信の体制をあらためて整えること、等を中心に3つの事業で13のプロジェクトを推進するとの説明がありました。

続いて、内田信幸事務局長から予算案の概要について説明。以上の説明の後、理事、監事、顧問と質疑応答が行

われ、議案はすべて出席理事全員一致で原案通り可決承認されました。  
(大石 敏晴)

## 2024年度 地方自治体からの新研修生ご紹介

### 新しいふれあい社会の 創造に向けて

東京都教育委員会  
窪田 健二 くぼた けんじ

4月より東京都教育委員会から「令和6年度長期社会体験派遣研修生」として、共生社会推進担当に着任しました窪田健二と申します。入都してから11年間、知的障害特別支援学校の教員として勤務していました。

昨年度、私が在籍していた学校では、地域の小中学校の児童・生徒との交流、プロバスケットボールチームとの体験

授業、地域のお祭りへの参加等を通して、さまざまな交流学習をしました。地域の方々とふれあい、つながることがとても大切だと実感した1年でした。人生100年時代が到来し、少子高齢化社会となっています。また、デジタル機器の発展により、私たちの生活は変化し利便性が向上しています。このような時代だからこそ「新しいふれあい社会」が必要なのかもしれません。地域の方々が積極的につながり、互いに認め合い、自然にふれあえる環境をどのように構築し、活用するののか勉強したいと思います。

さわやか福祉財団では、地域で助け合う共生の仕組みづくりを進めています。1年間の研修期間ではありませんが、財団の一員として微力ながら尽力していきます。どうぞよろしく願っています。



# さわやか活動日記(抄)

column

情報交換と事業の広がりにも効果

## 「地域ささえあい協議体情報交換会」と 第1層協議体での協力体制

■ 埼玉県川島町 ■ 担当 共生社会推進リーダー・岡野 貴代

3月下旬、川島町「地域ささえあい協議体情報交換会」にアドバイザーとして参加した。参加者は7地区の第2層協議体委員32名。

この情報交換会は、各協議体を越えた情報交換によって活動のヒントを得るとともに、各協議体委員同士のつながりづくりを目的としている。また、年度末に行い、活動計画を作成する

時間を設けることで、この場で得た情報も活用しながら年度計画を作成し、次年度に向けたモチベーションを高める場としている。

当日は、それぞれの協議体を越えた委員同士の情報交換の後、各協議体単位で年間計画を話し合い、全体発表で共有した。また、2023年度に実施予定だった協議体による現場視察が

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC生活支援コーディネーター



できなかつたため、隣接する川越市の活動事例を当財団より紹介した。

全体発表では、サロン開催場所を増やした協議体、地域ボランティアと共に開始した地域食堂をコロナ禍前の倍以上の規模に活性化させた協議体、新たに見守り活動やラジオ体操など活動の充実を図っている協議体、地域で増えている認知

症の人への理解を促進し当事者を安心させたいと、認知症サポーター養成講座を通してつながりを深めてきた協議体、企業による講座を活用し地域の活動に関心のなかつた住民へのアプローチもしながら、協議体通信の手渡し配布によるきめ細かな見守り活動を実施している協議体、体操の集いの場への支援や民生委員との情報交換を進めてきた協議体、集落単位で集いの場の開催を通してより身近なつながりづくりを目指してきた協議体と、それぞれ活



川島町「地域ささえあい協議体情報交換会」の様子

発で特色ある活動が報告され、24年度に向けた活動計画も発表された。

こうして協議体が行っている活動は、さまざまな事業間連携や、多様なネットワーク形成にもつながる動きを見せている。

介護予防事業との連携では、介護予防体操の集いの場が続いて協議体がサロンを展開し、参加者同士のつながりづくりや、体操ができない人でも参加できる場づくりにも努めている地区もある。

認知症施策に関しては、地域包括支援センターが主催する認知症サポーター養成講座に協議体委員が協力し、寸劇や体験談などを披露して、住民目線での認知症理解を広めている。またそうした内容が分かりやすいことから、小学6年生を対象とした認知症サポーター養成講座も実施した。

企業との連携では、SCが協議体に情報を提供し、花王、ちふれ化粧品、ウエ

ルシア薬局、キューピー等の協力による美容や健康に関する住民対象の講座を実施。企業は住民の生の声を聞き、住民も企業の力を借りることで、集いの場の周知や、これまで地域活動に興味や関心のなかった層の活動参加につながった。警察署が各集会所単位で防犯講話を行いたいとの申し出もあり、協議体も積極的に活用している。

また、地域ケア会議にアドバイザーとして出席しているSCからも協議体が創出した活動や住民主体の集いの場の情報が提供され、通所型サービスSC終了者の地域での受け皿として生かされている。

このような活発な取り組み

みは、毎年行うこの情報交換会だけでなく、2か月に1度定期的に行っている各協議体のリーダー・副リーダーによる話し合いの効果も大きいと感じている。川島町ではこの場を第1層協議体とし、各第2層協議体同士の情報交換と協働体制づくり、SCによるタイムリーな情報提供による町全体の助け合いの底上げを図っている。

協議体の主体的な動きはもちろんだが、こうした定期的な情報交換やSCによる支援が、生活支援体制整備事業の継続的な活性化に大きな効果をもたらしていると感じている。今後も川島町の動きに注目していきたい。



ふれあい推進事業

助け合い創出を目的に

「支え合いのまちづくり勉強会」開催

居場所、有償ボランティアについてアドバイス

■北杜市（山梨県）

【3月11日】北杜市で、昨年12月の住民フォーラム後2回目となる「支え合いのまちづくり勉強会」が開催され、住民14名と関係者が参加した。1回目の勉強会は1月に開催。SCらがフォーラム参加者アンケートで記名した約20名の住民に声をかけ、思いを語り合ってもらおう機会とした。

今回の目的は「助け合いの創出」。事前アンケート



で参加者に聞きたいことをたずね、それを基に当財団が講演した。同市は移住者が多く、勉強会参加者も移住者が多かった。アンケートの「移住者と昔から住んでいる住民の交流をどうするか」との質問を受け、高齢化も進み不安を持つ人が増えていることを意識して、新たなつながりをつくりお互いに助け合う、という視点で共生型常設型居場所と

有償ボランティアの立ち上げ等について説明した。事例は、長崎県西海市雪浦地区で週1回、旅人と住民が交流する「ビアホール」等の事例を「ごちゃまぜの仕掛け」として紹介するなどした。やる気のある同じ思いの人が数人集まり話し合いを始めること、これからの人口減少社会では多世代が交わる「ごちゃまぜ」の仕組みをつくっていくことが大切、とポイントを伝えた。また、新潟市「実家の茶の間・紫竹」の事例で居場所運営のノウハウを、山形県天童市「NPO法人ふれあい天童」の事例で有償ボランティアについて説明した。

質疑応答では「移動サー



北杜市「支え合いのまちづくり勉強会」の様子

ビスは道路運送法に抵触しないのか」「地域の子どもはバスで送迎されており、見守りや関わる機会がないに等しい」との声が上がり、財団からは助け合い移送について説明。子どもとの交

流は、静岡県袋井市「高南の居場所あえるもん」で土曜日に開催している「カレーの日」や、他地域のバス停での見送り等を紹介。住民勉強会に学校の校長先生も参加して地域の課題を話し合ったことで、学校（子どもたち）と高齢者との連携が始まろうとしている事例（長崎県西海市）も紹介した。

グループディスカッションは「自分の現状や、やってみたいこと、講演内容を聞いて思ったことについて」として意見交換。「さまざまな場所で活躍できる特技のある人を集めて、子どもを巻き込むためにイベント開催、介護事業所との連携」「有償ボランティア

の仕組みがぜひ欲しい、移動サービスもあつたらいい」

「一人暮らし高齢者が増えているが、災害時の避難計画が機能してほしくないと思うので見直してほしい」「市職員の熱量が足りないように感じる」「話し合いの場の不足」「ごちゃ混ぜの地域づくりに魅力を感じた」「現在、公民館カフェを計画している人がいる」等の発表があった。

最後に財団より、「だんだん本音が言い合える関係

が生まれてきているように見えた。この熱が冷めないように話し合いを継続して

はどうか。一緒に取り組みたい助け合い活動を具体的に立ち上げる話し合いや、地域の仲間にも声をかけて今後の地域について話し合うなどいろいろある。若い世代にも声をかけて話し合っている地域もある。SCや行政、社協等も支援してくれるので一緒に取り組もう」と呼びかけた。

（鶴山 芳子）

## 住民勉強会最終回 活動創出に向け意見を出し合う

### ■西海市（長崎県）

【3月17日】昨年10月に大瀬戸地区で開催されたフォ



ラム後、住民勉強会を重ねてきた西海市。この日、

最終回となる4回目の勉強会が開催され、当財団が協力。雨にもかかわらず約40名の住民が集まった。

SCによるこれまでの勉強会の振り返りの後、グループワークを実施。発表では、「居場所を始めたいので見学に行ってみたい」「食事による交流や、お寺での居場所などもいいが移動をどうするか」「買い物ツアーや通院介助など移動支援の必要性を話し合った。困っている人がどこにいるのか分からない、手を出し過ぎると余計なことをしていると言われてしまう」「既存の活動にもっと多くの人に参加してほしい。継続していきたい。回覧板などで周知するのがよいか。

来られない人をどうするか。男性の参加への工夫は？」

「こういった勉強会や活動に参加できない人たちをどうやって引っぱり出すかが問題」「移動支援・生活支援を狭い地区でリーダーを中心に始めていきたい」等の意見があった。

財団からは、「これまでフォーラムから勉強会を重ね、思いのある人同士で話し合ってきたことがとても良かった。今後の西海市の地域づくりを進める大切な仲間。こんなに素敵な人たちと同じ地域にたくさんいることも共有できた良い機会だったのではないか」とコメントした。また、居場所については「ぜひ見学に行くなどして、いろいろな

「やってみたい」を始めよう。やってみると見えることがあるので、みんなで話し合って課題を解決し前に進もう。1年経った頃にSCらに協力してもらい、さまざまな居場所の皆さんが集まり、関心のある人にも声をかけ、情報交換会を開くのも良いと思う」と話した。

困っている人をどう引っぱり出せるかについては、「意見として出た回覧板の活用も良い。SCらと聞き取り調査をしている地域もある。孤独死が生まれた地域が危機感を持ち、住宅地図を作成して障がいのある人や一人暮らし高齢者など要援護者を把握して、いざというとき助け合えるよう

にしたりしている」等の方法を伝えた。

移動支援については「まずは不安を払拭することが大事。助け合いの仕組みで行っているところは、保険に入る、助け合いの範囲で取り組む、お試しをしてみても安心して実行できるようにしている。生活支援と併せて取り組み、どの支援も謝礼を同じにするということも可能になっている。同市崎戸地区の『お助けマン』もその一つで、そういう仕組みの中で通院介助などにも取り組んでどうか」等を助言した。

具体的な質問が出て、取り組みが始まりそうである。最後に「SC、行政、協議体もバックアップしていく



西海市大瀬戸地区で行われた最終回（4回目）勉強会の様子

ので、一緒に取り組んでいきましよう！」と伝えた。同市では24年度、西彼地区で10月にフォーラムを開催し勉強会を継続していくとのこと。

（鶴山 芳子）

協議体編成に向けて

## 「地域支え合い勉強会」開催

■市川三郷町（山梨県）

【3月19日】市川三郷町で「第2回地域支え合い勉強会」が開催され、当財団が山梨県のアドバイザー派遣事業として協力した。同町では4月以降、今回の参加者を核に第2層3圏域で協議体を編成していく予定。冒頭、SCの佐野泰史氏と町担当者の芦沢隆子氏から24年度のフォーラム開催（予定）、第1層協議体の見直し、町全体への啓発等について説明があった。

続いて財団より「支え合い、助け合いを広めるために」と題して講演。「助け合い体験ゲーム」も交えながら、世代を超えた地域づくりへの話し合いの事例（県内南アルプス市、新潟県新発田市）を通じて、自分事と感じる住民が増えることの大切さや若い世代の声を聞くこと、皆で話し合う楽しさなどを伝えた。

グループワークは、「地域で支え合いを進めるために、どんな人、団体、組織に声をかけたらよいと思いますか？」をテーマとした。発表では、「いろいろな団体に声をかける。地域のコミュニティ密度（温度差）が各地区で異なるため難しい」「公民館の館長や運営委員、民生委員等に協議体の説明会をする。趣味の団体や麻雀で集まる頻度を高める」などの意見があった。



市川三郷町「第2回地域支え合い勉強会」で行われた「助け合い体験ゲーム」の様子

最後に財団が「4月から3地区に分かれて話を進めるにあたり、忌憚のない意見が出た。既存の組織にとらわれない、世代や団体等さまざまな人が参加する協議体にしていきたい」というところは共通していたと思う。SC、行政、社協も後方支援するので、ぜひいろいろな人を交えて話し合いを続けてほしい。今後の活動に期待しています」とまとめた。

関係者も、世代を超え、趣味活動等も含めた多様な

（鶴山 芳子）



調査政策提言プロジェクト

厚生労働省 地域づくり加速化事業  
第3回運営委員会に出席



〔3月16日〕厚生労働省の地域づくり加速化事業「第3回運営委員会」に出席した。議題は、(1)地域づくり加速化事業についての報告(①伴走的支援実施報告、②ブロック別研修アンケート結果)、(2)本日の論点(①次年度に向けての事業評価、②加速化事業の進め方について)。

(1)は、全国48か所で行われた支援について、地域の状況や目的、取り組みプロセス、成果や課題をまとめた報告書に基づいて説

明され共有した。また、厚生局ごとに工夫を凝らして行われた研修会についても共有。報告事業についてさまざまな意見が出された。(2)については、第2回運営委員会の議論も踏まえて事務局案が出され、さらに活発な議論が行われた。

加速化事業では、総合事業等を生かした地域づくりを市町村の多様な主体が参画して議論し、チームで推進していく取り組みを伴走支援していく。当財団からは、目指す姿である「高齢

者の自分らしい暮らしの実現」に向けて、気づきが生まれ、意識変容や行動変容

が生まれる過程を評価することはとても大切だが、それにより地域がどう変わっていったかというところが最も大切な評価である。目指す姿を自分事と考える住民が増えていくように、また、住民と専門職をはじめとするさまざまな人や組織が、ネットワークづくりを推進しながら時間をかけて

地域づくりを推進する事業であることを意見として述べた。

24年度は、厚生局を核とした24か所での伴走的支援が予定されている。厚生局ごとの情報交換会を提案したが、地域の実情に合った地域づくりが推進され、目指す姿の実現、住民一人ひとりが自分らしく暮らし続けられる地域づくりにつなげられればと思う。

(鶴山 芳子)

「広がれボランティアの輪」  
連絡会議主催の勉強会を開催



〔3月8日〕ボランティア・市民活動を推進するためにネットワークを組む「広がれボランティアの輪」連

絡会議は、全国54の団体で構成されている。当財団はその幹事団体の一つであり、勉強会プロジェクトチーム

のメンバーである。

毎年開催している勉強会、今年度は「居心地の良い居場所づくり（ゆるやかなつながりをめざして）」をテーマに実施した。今回は学生や個人参加の方も目立ちハイブリッドで130名を超える参加となった。

前半は、当連絡会議の上野谷加代子会長の進行により3つの団体から発表があった。当財団主催の「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」に登壇いただいた「NPOチームおせっかい」（大分市）代表の後藤由布さんからは、本職である「コープおおい」が運営費を補助して昨年12月に立ち上がった、空き家を活用した居場所の紹

介も併せ、若者や社会人など中間層である「何者でもない人」を対象にした夕食会「何者でもない食堂」立ち上げの経緯と運営の工夫が紹介された。同フェスタ発表時以降、飲酒可能な会場でアルコールOKの開催を試みたり、参加者のリードによりフィンランド発祥の「モルック」を楽しむなど、常連を大切にしつつ新しい参加者も入りやすい環境を意識し、さらに活動が発展している様子が語られた。

「NPO法人Chance For All」の学生チームが運営する「駄菓子屋roadori」（東京都足立区）からは、立ち上げリーダーの飯村俊祐さん（大

学4年生）と現リーダーの伊久美佑花さん（大学2年生）が登壇。地域でこどもたちを見守りたいと、商店街の一角で2021年夏に5人のメンバーで始めたこの場所は、駄菓子屋の奥にフリースペースを設けて毎日オープン。何をしてもいいし、何もしなくてもいい空間づくりを大切にしている。今では、関わるメンバーは大学生を中心に高校1年生以上の約140名。こどもが好き、社会貢献がしたい等きっかけはさまざまながら、こどもファーストの理念に共感し、こどもを評価せず、ごちゃまぜで過ごせることを大事にしている様子が披露された。

「neighbor」（東

京都世田谷区）からは、馬場未織さんと吉村英敏さんが登壇。2人は家族介護者と訪問看護師という立場で出会い、迫り来る高齢社会に向け、たまたまお隣にいた人をぱっとケアできる「カジュアルケア」の文化をつくる取り組みをスタート。月に1回、商店街のホコ天で、コーヒーを提供しながら血圧を測る活動は、ケアを出し惜しめない光景をまちに馴染ませる実践だと紹介。ほかにも「資本主義の中心でケアを語ろう」の呼びかけで、毎回テーマを設けてケアを語る飲み会を開いたり、どこにいてもつながれるオンラインによる「井戸端会議」や「ながらラジオ」を開催するなど、

すぐにつながり、すぐに助け・助けられる心の居場所づくりを実践している様子が紹介された。

後半は、会場では登壇者に加わっていただきグループワークを実施。会場の各グループとオンライン参加者1グループから発表してもらい、皆で共有した。

最後に上野谷会長が、「誰もがボランティアな気持ちを持ち、ボランティアの精

神を広めるためにも追体験していくことが大事である」とまとめた。

アンケートには、「ナナメの関係をつくるいごちのよさについて再考するきっかけになった」「いかに地域の方々を巻き込んでいくかという壁に直面しており、今回の事例発表はとても参考になった」などの感想が寄せられた。

(上田 恵子)

### 社会参加推進事業

#### 社会人地域共生活動参加推進プロジェクト

#### 高齢社会NGO連携協議会

2023年度第2回総会開催

シンポジウム共催、アンケート調査・提言等について協議



【3月18日】「2023年

度第2回高齢社会NGO連

携協議会(高連協)総会」

を開催。一般社団法人日本

老年医学会名誉会員・元理事長の大内尉義氏と、当財団の清水肇子理事長の両代表出席の下、会員22団体中、参加11団体(会場参加5団体、オンライン参加6団体)、委任状提出11団体(個人会員3名参加含む)で総会は成立した。主な議題は、1・2024年度事業計画(案)の件、2・2024年度予算計画(案)の件で、決議案はすべて満場一致で了承された。

24年度事業計画(案)では、「1 政策提言及びそのための調査事業」として①新たに日本老年医学会と連携し、6月13～15日に愛知県名古屋市で開催される日本老年医学会学術集会初日にシンポジウム

を共催。高連協の取り組みおよび考え方を報告し、より良い高齢社会のあり方、高齢期の生き方を広く提言することとした。

シンポジウムでは、両共同代表をはじめ計4名の登壇者が「今後の超高齢社会を明るく活動的にするための活動をどう進めていくか」をテーマにそれぞれの立場から講演する。大内共同代表は医学の立場から「高齢者の定義のその後の展開―エイジフリー社会をめざして」、清水共同代表は高連協活動の視点から「NPO・NGOが担う役割について」として講演する。高連協および関係者には、シンポジウム参加を積極

的に呼びかけていく（関連↓28ページ）。

②高連協の理念実現および高連協の活動発信を目的に、24年度調査研究事業として、会員団体を通じたオンラインアンケートを活用する提案・提言を新たに実施する。6月の学術集会との共催事業や子ども・子育てなど時流を鑑みてテーマを決め、年度後半をめどに会員団体とその関係組織にアンケートを実施し、提案・

提言につなげていく。

「2 手上げ事業」は、昨年度に続き当財団の「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」が承認された。オンラインフェスタも、高連協を通して広報・集客等につなげたい。

シンポジウム共催、高連協会員等のオンラインアンケート調査・提言共に新しい試みであり、手上げ事業も含めて、ぜひ当財団の社会参加推進事業につなげてい。（玉置 英明）

## 事務所 だより

●毎月、第1週目に職員全員が集まって情報を共有する定例会議。4月には年度も改まって、会議では清水理事長から今後の方針が説明され、みんな引き締まった面持ちに。支援者の方々や地域の皆さんとのつながりをより一層深めながら、今年度も助け合いを広げるために財団一同頑張っていきます！

みんなで、誰もが安心して暮らせる  
地域共生社会をつくりましょう



公益財団法人



公益財団法人  
さわやか福祉財団

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人  
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人  
年会費  
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を  
いただく場合の  
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856\*

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

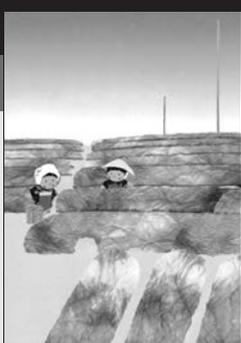
※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

\*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。  
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

「すぎなこと どんどんふやしておおきなあれ」5月5日(日・祝)～11日(土)は「児童福祉週間」です

表紙絵から

はり絵・  
池田げんえい



「若葉」

編集後記 ●杉山孝博さんと本間郁子さんのエッセイがスタートしました(杉山さん・P22～、本間さん・P26～)。●「活動の現場から」は、認知症の人が安心して買い物をするための活動。いろいろな人たちが協力して取り組んでいます(P4～)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、東京都荒川区。家族のような関係性を築こうとする活動です(P12～)。●5月5日から1週間は「児童福祉週間」です。今年度の標語は、上覧の加藤共泰さん(6歳)の作品です。

助け合いを  
広げよう!

新  
ひとりごと

向井 晶子

生きやすいってどういうことだろう

自分の味方がいることかな

味方ってどういうことだろう

「ねえ、きいて！」って頼んだら、

何も言わずに「うん、うん」って聴いてくれることかな

聴いてもらうと、いやなことがどこかに行っちゃうし、

気持ちがすっきりすると思うんだ

聴けるひとにわたしもなりたい



●NPO法人チャイルドライン支援センター事務局長  
チャイルドラインは、子どもの生きやすい社会を願い、  
「子どもの権利条約」の理念に基づき、電話やチャットで  
子どもが自身の力で前に進めるよう寄り添い聴いています。

## あそび 5月号

通巻369号 2024年5月10日発行  
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい  
取材協力 七七舎  
イラスト すずきひさこ  
レイアウト 菊池ゆかり  
印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子  
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団  
〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階  
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp  
https://www.sawayakazaidan.or.jp  
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

# 助け合いの地域づくりに、 当財団のツールをぜひご活用ください

当財団HPトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は1,100円(税込・送料別)となります。

## みんなでやってみよう!

### 訪問助け合い活動

お互い様の気持ちを一步進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。



## いつでも誰でも行ける場所を 広げよう!

### 居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。



## 新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動における、ニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。



【お問い合わせ・お申し込み】

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp